

## 彙報

## 田辺元先生追悼会記事

去る昭和三十七年十一月二日(土)午前十時半から、京都大学文学部哲学研究室主催の下に、京都大学文学部第一教室において、田辺元先生の追悼会が行われた。

## 開会の辞

先生の生涯と業績

学部長挨拶に代えて

門下生を代表して

出席者を代表して

野田又夫氏

上田泰治氏

高田三郎氏

武内義範氏

山内得立氏

植田寿蔵氏

石田 仁氏

西谷啓治氏

## 閉会の辞

なお司会は辻村公一氏によってなされた。出席者数七十余名。以下は諸氏の話の内容の一部である。

上田泰治氏

「……最後に、日頃の先生の御様子を二三述べますと、先生は、火曜日に特殊講義、金曜日に普通講義、土曜日に演習を受け持たれた。普通講義は十六年以後第一教室を使用され、最初は和服を着て、壇上を歩かれる。或時は静かに、或時は熱をこめて語られました。この講義のためにカントやヘーゲルの抜書

をして、昭和何年度分普通講義と記して、纏めておかれましたが、実際に講義で使われたのは僅かでした。講義の前夜は眠れないといつて、睡眠薬を用いました。枕許には手帖を置いて、頭に浮んだことを直ぐ書き留められました。先生は講義に熱意を持たれ、『精神現象学』は三冊お持ちになり、学校では第二版を使われたのですが、後に拝見しますと、最初に読んだ際は黒鉛筆で、次の際は赤鉛筆で、最後には青鉛筆で、書き込みをなさってありました。外にも三角や丸や二重丸の印が書き込まれていて、十年余りの現象学の講義での先生の苦勞が印象深く残っております。」

高田三郎氏

「……北軽井沢においても、田辺先生は、非常に几帳面な、節制そのものの生活を送っておられたように、お見受けしました。絶えず規則正しく散歩をなさった。先生は最後まで、絶えず新しい書物をごらんになって、中には病院へお入りの後註文されたものもあったのです。中世関係で申しますと、スコツツスの哲学に大変関心を持っておられました。先生がマラルメ、イエーツとともに、関心を持っておられたジェラルド・ホプキンスという詩人—イエズス会の坊さんであります—はスコツツスのことを深く学んで、その影響を受けているのです。ただ学殖をつむ意味でいろんなものに涉るというのではなく、先生には一貫した哲学者のたましいががあったのです。私はこうした先生の気魄に打たれたわけでありませう。ホプキンスは一方で美と自然の愛好者であったと同時に、美をおそれる人であったと

云われておりますが、先生にも、一方では人を寄せつけない厳しきがあると同時にその厳しきの極限において、すべてのものを容れる博大な愛を感じたのであります。稀に見る愛情と、非常に厳しい知的態度とにふさわしいものとして、先生は北軽井沢の生活をお選びになったのであろうと思ふのです。……」

武内義範氏

「……先生の愛は厳しさとやさしさのこもった哲学者らしい愛でありました。学徒出陣の弟子を送る時には、先生は途中から泣き出されてしまったほどです。先生は學問に自信を持つと同時に、謙虚であられて、真理に対しては己を空しうするという態度でありました。当時土曜日が面会日で、私達若いものは午後早くから行くことになっていました。四時半になると、高坂・西谷・下村・高山等の先生方が来られる。田辺先生は私達にもそれらの先生方にも同じ様な話をされ、私達若いものとの間で問題となった議論が先生方の際にむしかえされることもありました。先生は若いもの言うことでも、正しことは、襟を正して聞いておられたのです。先生は昭和十一年頃からキルケゴールに関心をお持ちになり、私達にもキルケゴールを勉強するようにお奨めになった。当時「実存哲学」という講義ではヤスパースを取りあげられました。そしてヤスパースの論文が野田教授の訳で、「哲学研究」に載せられた。これは、その頃ヤスパースがナチスから追放されそうになっているのを知って一日独文化協定が出来た頃でした。彼の論文を日本の有力誌に載せることによって、ヤスパースへの一助としよう和田辺先生が

配慮されたのです。さき頃私がヤスパースに会った時、彼はこのことについて、田辺先生に感謝しておりました。……留学中は、むこうの習わしに従って、クリスマス・プレゼントとして、当時評判のよかった『碧巖錄』の独訳をお送りしました。先生はそれを最後の十頁ほどを残して、十二月末までお読みにになりました。後にその本をいただいたところ、細かい書き込みがあり、終りから十ページほどの処にしおりが挟んでありました。先生から御返事として、色々面白い感想を聞かせていただいたのですが、私のもとへその手紙が届いたときには、先生はずでにたおれられていたのです。」

山内得立氏

「田辺さんにもっとも親しくしてもらったのは、第一次大戦後ドイツと一緒に生きていた時でした。まだ学生気分でしたが、ドイツが困っていた時代で、留學生は好遇されました。田辺さんとハイデッガーに個人教授をしてもらったこともありました。田辺さんはむこうにいる時も、あちこち見物に行くという事は余りなくて、下宿に閉じこもって、ヘーゲルなどを読んでおられました。ちょうどその頃オスカ・ベッカーという人もフライブルクに来ました。この人は美学、数学に詳しい人でしたが、田辺さんは彼よりも学殖があり、単なる留學生としてでなく、一かどの学者、研究者として認められていました。……」

植田寿蔵氏

「……もとの教授会は陳列館の会議室でやっていた。長い部屋であった。学部長の浜田さんの前に、田辺、天野、山内、植

田と並ぶのが常だったので、浜田さんは哲学科のうるさいのが前に並んでいるので憂鬱だといわれた。中で一番うるさいのが田辺さんで次は私だったらしい。ただ田辺さんは理路整然とするさく、私はがさつにうるさいらしかった。……或る時、小松原の私の宅へ来られた事がある。菓子など食べられないので、もてなしようがなかった。俵屋さんを待たせたままで、途中で催促されたが、もうすぐといいながら、結局三時間近くも悠々と話をしていた。そういう鷹揚さももっておられた。……」

石田仁氏は後日譚をまじえて、田辺先生が東京の四中で教鞭を取っておられた頃のことを中心として、話されました。

なお当日欠席されました、下総高次氏は先生の写真三葉と共に、「田辺先生を偲んで」と題して、十月二十六日付の次の様な一文を寄せられました。主催者の手落ちで、当日それを出席者に紹介することができませんでしたので、ここにその全文を掲載致します。

「私が田辺先生とお近づきになった最初は昭和廿四年の六月に始まります。それはまだ終戦後の影響が各所に於いて見受けられた当時、筑摩書房から人を介しての話があり、先生の義歯を直して欲しいとの事でした。たまたま疎開中の一歯科医によって作られた先生の義歯が具合悪く、その事が毎日気になって、軽い神経症に陥ちいつているらしいので、先生のお住いまで往診して貰いたいこと。非常に山奥であるから、大きな診療器具、例えば歯を削る電気モーター等の携帯は大変なことであるし、また電圧が低いので、持参はしても使用はできないだろう。ま

た先生は大変気むずかしい方だから、恐らく食事なども一緒にはなされないだろうが、その点も予め留意して欲しいとの話でした。

当時、東京医科歯科大学のまだ一介の助手であった私にとつては、いま考えると、この条件付きの診療ということは、大変な冒険であったわけですから、これを承諾した動機は「私が若かった」ということで語れるようです。「軽井沢」という名前の魅力もあったようです。

最初の日は、筑摩書房の店の人(名前は忘れてしまいました)に同道して貰いました。ゲートル姿のその人は、わざと汚い風呂敷に辨当箱を装って、その中に印税の札束を入れ、また、先生のお趣味である洋楽レコード用の電蓄を、東京で買い求めて携えて参りました。ところが、こうやって持参した電蓄も、当地では電圧が低過ぎて十分な性能を発揮できません。それでも先生は、病床にある奥様の枕辺にそれを運ばれ、お二人して耳を近づけ合せて、熱心に聴きとろうとする様は、はつきりとした印象に残りました。

毎土曜日の朝七時に上野を発って、午後二時頃に当地に着き、それから診療をして一泊し翌日曜に帰京する段取りでした。これを四・五回繰返して先生の義歯を完成致しましたが、その間に、病床中の奥様の痛む歯の抜去もして差上げました。幸運にも先生の御満足を戴き、面目をほどこしましたが、一ヶ月に亘る診療の回数を重ねるうちに、軽井沢に対する私の魅力は、先生の人間の魅力の方に強く引かれて参りました。気むずかしい

どころか親しみをもって食事も共にして下さり、六月とはいえ夜はかなり寒いので、一緒に「コタツ」に入ったまま、夜遅くまで数々のお話を承りました。

\*

\*

それから三年も経ちました。私共の大病院でたまたま仏文学の「河野与一」氏を診療中、同氏から田辺先生の奥様の亡くなられたことを承りました。知らなかつたことの失礼をお詫び旁々、お悔みの手紙を差上げました。その返信として、奥様を失われた御自身の淋しいお気持が赤裸に書き誌されてありました。次に三年前に入れた義歯のうち、下顎の義歯の支えをなしていた御自分の歯が自然に脱落したので、下顎の義歯の方をまた作りなおして貰いたいとの文面を頂きました。こん度も前回と同じく土曜日毎に伺って診療の責任は全う致しましたが、先生のお机の上に、亡くなられた奥様のお写真を拝見して、強く胸をうたれる思いでした。半ば口を開かれて前歯がのぞかれる死顔を、美しく化粧なされた様子を拝見するにつけて、奥様に對する先生の御心情が十二分に推察されました。診療を完了して帰京いたしましたから、改めてまた慰めのお手紙を書きました。いまから考えると、はずかしい限りなのですが、実は下手な詩を作って差上げたのです。「世の中の悲しみは決して先生ばかりでは御座居ません。山蔭に鳴く『ほととぎす』さえも悲しみや淋しさに堪えています。どうぞ明日も雄々しく生きて下さい」と云う意味だっただと思います。これに對する返信のお言葉には、もうたまりかねた様子が伺われ、腰折れとて書き添えら

れた数首の中にも、当時先生がどんなにか悲痛の底にあり、また、どんなにか奥様を愛しておられたかが判るので御座居ます。……妻死して小生の心に空きましたうつろは、限無き感じでございます。お察し下さいました通り洋装に独り淋しさを紛らせましてもこのうつろを充しては呉れませぬ。堪えかねて孤独の部屋に一人声張り上げて妻の名を呼ぶ癡態も時に抑えようがございますぬ。御憐笑下さいませ……

妹恋しわが呼ぶ声にいらえせよ

再び生きて我に答えよ

ほととぎすわれも妻恋う汝が声を

聴けば悲しも同じ思いに

\*

\*

昭和三十年八月に、私は阪大歯学部にて転任いたしました。そして昭和三十五年五月京大の「辻村公一」氏の書翰を頂き、田辺先生の当時の義歯が大分破損して再製作の必要に迫られているが、どうにかならぬのかと御相談を受けました。その後二度ばかり同氏とお会いした結果ここに三度、北軽井沢へお伺いすることになりました。伊勢湾台風の生々しい爪跡が山肌の各処に見受けられ、懐しい想い出の草軽電鉄は消えて、北軽井沢も当時の様子とはかなり変わって映りました。しかし先生には少しのお交りの様子もなく、お部屋の中もお家の囲りも旧のまま御座居ました。宿泊には先生の書齋を開放して下さい、うず高く積まれた書籍の間に寝て、哲学者になつたような気分浸

らして頂きました。

吹きすさぶ石は浅間の野分かな

と認められた「唐木順三」氏の短冊も、昔のままの懐しさであったわけでございます。朝の日課のお散歩もお元気で、私のカメラに快く納って下さいました。その時の写真数葉は焼き増しして差上げましたが、撮影時にいまカラー写真の方を練習中ですと申上げると、

「今度参られた時、その色彩写真で庭の花と一緒にうつして貰いませう」と何気なく申されました。

花をめで鳥いつくしみし妹が魂

いづくの野山いま駆くらんか

と生前に追慕された先生でしたが、そのみ魂は今はきつと奥様のみ魂とつれ添って、あの懐しい山の上であり、紅・黄葉しくした樹海を仲良く賞でていることと想れます。

私はもし出来ましたら、四度北軽井沢の地に参りたいと思っています。この時は齒の方の道具を持たないことで心淋しい気持がいたします。しかし今度はカラーフィルムを持参して、先生の受賞された「ダリヤ」や「桔梗」等の色彩を納めて帰り、あの時、何気なくおっしゃった先生のお言葉に、せめて応えたものと思っております。

(この項の記事は京都大学大学院学生、加茂直樹・土屋純一・木曾好能の諸君の当日の筆記に負う)

## 京都哲学会公開講演会記事

昭和三十七年度の京都哲学会公開講演会は、十一月二日(土)午後一時半から、京都大学文学部第一教室において行われた。

一、いわゆる錯視の問題をめぐって

……京都大学助教授 柿崎祐一氏

一、田辺哲学について……京都大学教授 西谷啓治氏

終了後、楽友会館において、委員、賛助員、その他一般会員多数出席のもとに懇親晩餐会を開き、井島会長による京都哲学会の現状報告の後、柿崎、西谷両氏を囲んで、九時過まで歓談した。当日は午前には田辺先生の追悼会もあった関係か、講演会、懇談会とも、近年にない盛会となった。なお両氏の講演内容は、それぞれ本号及び田辺三元先生の追悼号に収録することになった。

## 西谷教授停年講義

停年により昭和三十八年二月二十七日限り、文学部を退職されることになりました西洋哲学史(近世)担当の西谷啓治教授の停年最終講義は、「哲学の課題について」と題して、去る昭和三十八年一月二十三日(水)午後三時から、法経第七教室で行われました。なお退官後は、大谷大学にて教鞭を取られることになっております。